

「おたすけ」活動（シガセイサクショにて草木染め体験）報告書

1. 活動日 平成 28 年 2 月 27 日(土)
2. 場所 シガセイサクショ(奈良－葛城山)
3. 参加者 クロフォード後藤花・宮里真以・上野誉子・藤原風樹
4. 活動内容

理系女性教育開発共同機構主催の学生支援事業「おたすけ」の活動として、奈良県葛城山シガセイサクショにて草木染め体験に参加。草木染めは梅の枝を染料に、2種類(鉄媒染とミョウバン媒染)の媒染液を用いて行った。染料を煮出すための薪割りから、染料の煮出し、生地の様付け、浸し染め、媒染、2回目の煮染め、最後にすすぎを行って全工程が終了した。作業の合間で、草木染めを生業とされているシガセイサクショのご夫妻に草木染めを生業にするに至った理由や、仕事の大変さと楽しさなどのお話を伺った。

5. 感想

(1)草木染めの特徴について(化学染料に対して)

奈良県葛城山に草木染めの作業小屋を構えるシガセイサクショさんの作業小屋にお邪魔して、梅の枝を染料とした草木染め体験を行った。通常の草木染め体験では、事前に染料を煮出し、参加者は生地の様付けと浸し染めから行うが、今回は特別に染料を煮出す工程から体験させていただいた。染料の煮出しから最後のすすぎまでで半日かかり、これに染料の採取と生地のタンパク処理(生地を色濃く染めるための下処理)、染めた布を乾かす作業まで考慮すると、1日では足りないくらいのとても手間のかかる作業である(その手間を実際に体験することもこの活動の目的の一つである)。

日本では古くから自然の植物から染料を取り出して糸や布を染めてきた。しかし、1900年初頭から化学染料や化学繊維の開発が西洋で進み、日本でも明治初期から化学染料が少しずつ輸入され、草木染め(天然染料)は段々と下火になり化学染料で染めることが主流になった。現在では流通している製品のほとんどが化学染料で染められたものだ。草木染に代わり化学染料が広く使われるようになったのにはいくつかの理由がある。まずひとつに、「安定している」ことが挙げられる。染料自体の質が一定なので同じ色を染めるのに数値化でき、同じ色の製品を量産することと安定した供給が可能になる。草木染めでは時期や地域により手に入る染料が変われば、同じ染料でも質が一定ではない。ふたつめに、「安価であること」がある。先ほど述べたように、草木染めは植物を育て、収穫し、染料を煮だすなど大変手間がかかるため、人件費やその光熱費も考慮するとコストがかかってくる。また、化学染料は「長期保存が可能」だが、天然染料の中には採取してすぐ使ったほうがよいものなどもある。また、化学染料は草木染の柔らかい色合いに比べ、色が強く出やすいといったことなども広く使われるようになった理由と考えられている。時代が「大量生産(ファストファッション)」「画一化」に向かっていくなか、化学染料のもつ特徴が生産者側にとってとても理にかなったものであったと思わ

れる。しかし、実際に草木染め体験をしてみて(今回の草木染め体験に関して言えば)、染料は山のいたるところに栗のイガや梅の枝、桑の葉などが落ちていて、それらを草木染めに使うため「1年を通して様々な染料が山で手に入ること」、「季節や煮出し方、媒染液の濃さなど色々な要素が影響して同じ染料でも仕上がりの色と風合いがひとつひとつ異なること(同じものはひとつとしてない!)」、今回のように「消費者が生産者と一緒になって製品作りに参加できること」、「一度にたくさん生産できないからこそ染料を過剰にとって生態系のバランスを崩す危険が少ない」、といった草木染めの魅力もたくさん発見できた。これからは、自然の恵みを少しいただき、そこにしかない唯一無二の製品の魅力を生み出すことや、そういったものづくりのあり方が大切になってくるのではないかと思う。

(2)草木染めの工程について

草木染めは①生地のタンパク処理→②染料の煮出し→③生地の模様付け→④1回目浸し染め→⑤媒染→⑥2回目煮染め→⑦すすぎの手順で行った。①の生地タンパク処理は、タンパク繊維は色が入りやすい性質があるため、絹やウールなどの動物性繊維はしなくてもよいが、タンパクの含まれない植物性繊維である麻や綿に対して行う。呉汁や豆乳、牛乳に浸すことで生地の表面をたんぱくで覆い染液が染まりやすい状態にする工程である。また、草木染めで重要な工程が⑤の媒染である。染料を煮出した液に浸すだけでも生地は着色されるが洗えばすぐに落ちてしまう。そこで、植物の色素を鮮やかに発色させ、かつ色落ちしにくくするためにこと「媒染」という作業を行う。植物の色素に鉄、アルミニウム、銅などの金属イオンが結合すると錯体という科学的構造を作り発色したり、水に不溶な物質に変化する。この性質を利用して、植物染料を煮出した液をしみこませた繊維を、上記したような金属イオンを含む液に浸すと、繊維に絡みついた色素がその繊維の上で発色し、繊維としっかり結びつくことで鮮やかに染色されるということだそう。シガセイサクショさんの話では、1つのオリーブ(染料)から媒染液を変えることで7色出来ることもあるのだそう。また、江戸時代までは灰汁や酢、鉄錆や石灰などの自然のものを媒染材料として使用していた。今回使用した梅の枝も、鉄媒染液に浸したものはベージュブラウンに近い色合いになり、一方ミョウバン媒染液に浸したものはピンクベージュのような色合いになった。これに染料の煮出し液の濃さや浸す時間などを変えるとまた色合いが変わる。

(3)シガセイサクショさんについて

約6年前から草木染めをスタートする前は、奥さんののりこさんは仕立てなど洋服に携わる仕事をされており、ご主人のこうすけさんは自営業で工具などを販売するお仕事をされていた。現在は草木染めとオリーブの栽培(苗の販売、オリーブ加工品販売、その他山で育てた農作物の販売)などで生計を立てている。草木染めは趣味で独学と時々教室に通って習得していったが、ご主人のこうすけさんのオリーブを育てる場所を探していて、現在の作業場のある葛城山の土地に出会い、少しずつ今の形になっている

ったそう。経済的には2人とも働いていたときに比べ全然余裕はないと話されていたが、真剣にそして楽しそうに自然や、自分たちの作るもの(オリーブであったり草木染めの製品であったり)を待っているお客さんに向き合う姿はとても素敵であった。手作り市やオーガニックマーケットといったマーケットで販売することが多いそうなので、消費者のニーズを直接聞いてものづくりに反映出来るのもイチから自分の手で草木染め製品を作っているからこそその魅力であろう。また、のりこさんは草木染めをするトートバッグやハンカチなどを、仕立ての経験を生かして手作りされており、それもまたシガセイサクショの魅力になっているのだと思う。

今回の活動では、染めものの歴史や化学的知識と体験を通じて学ぶことが出来た。それだけではなく、葛城山の自然や、シガセイサクショさんの働き方や生き方を直接うかがい知ることができ、とても貴重な経験となった。私自身、生活工学を学んでいて、今後は何かしらものづくり(特に生活に密着したもの)に関わっていきたいと思っているので、ものづくりに対する姿勢やものづくりの過程を知るといった意味でもとても勉強になった時間であった。葛城山の作業場での草木染め体験にあたり、快くご協力頂いたシガセイサクショさんに心より感謝申し上げます。



<栗のイガを染料に草木染めされたトートバッグ。染料は同じだが媒染液が鉄媒染かミョウバン媒染かで手前と奥で全く色味が異なる。>



<梅の枝を煮出しているところ。ストーブはシガセイサクショさんの手作りのもの。>



<ストーブにくべる薪を割っているところ。薪も全て山の恵み。>



<生地の様付け作業。割りばしや輪ゴム、木の板などを用いて自由に様付けを行う。>



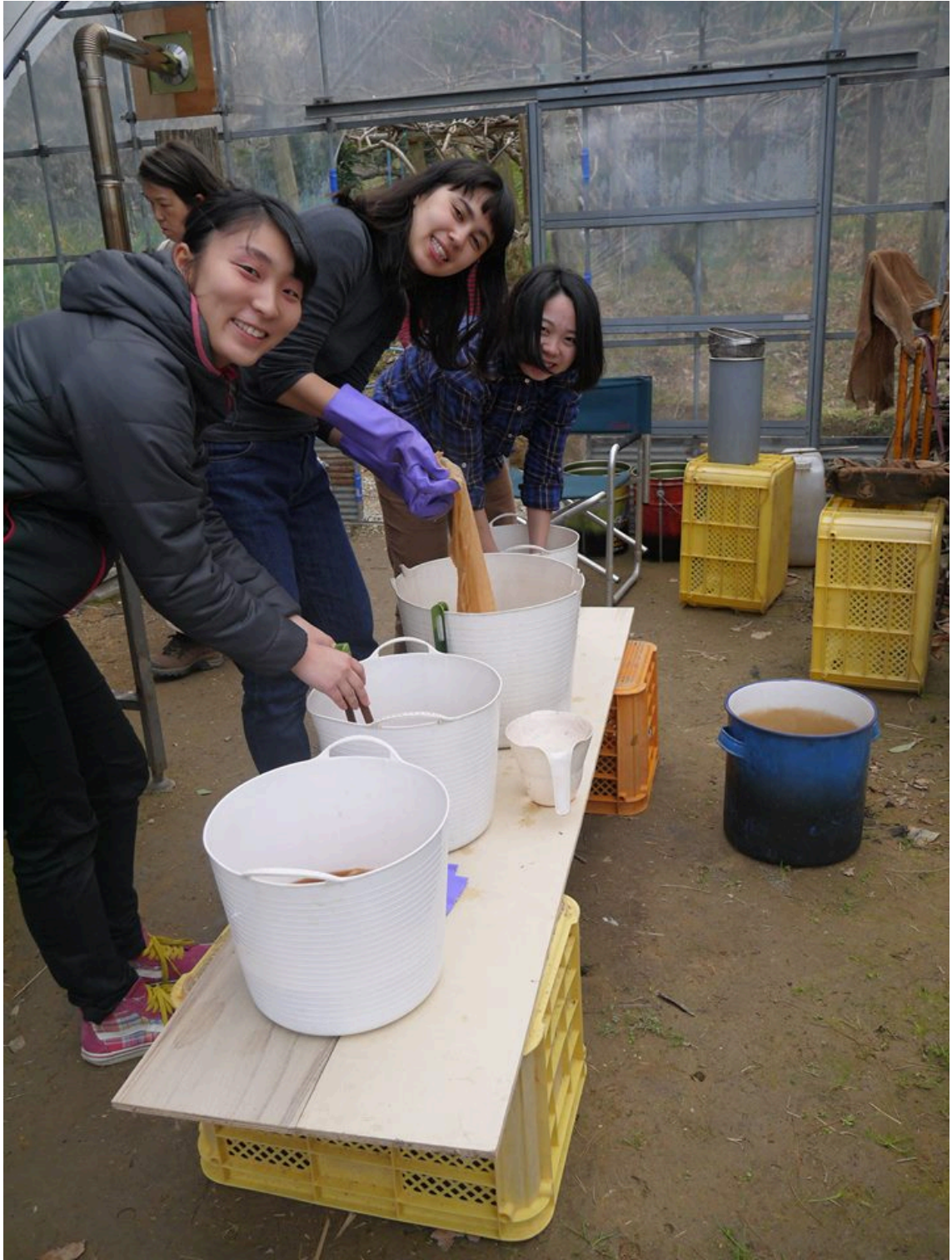
<染料を煮出している間にお昼休憩。作業場のすぐ側にはフキノトウがたくさん生えていた。>



<シガセイサクショさんの山小屋。>



<シガセイサクショさんの山小屋にて、取り立てのフキノトウを天ぷらにさせていただく。>



<1回目の浸し染めを行っているところ。>



< 媒染液に浸しているところ。左が鉄媒染、右がミョウバン媒染。 >



< 梅の枝×鉄媒染液で染めた靴下。 >



<梅の枝×ミョウバン媒染で染めたトートバッグ。>